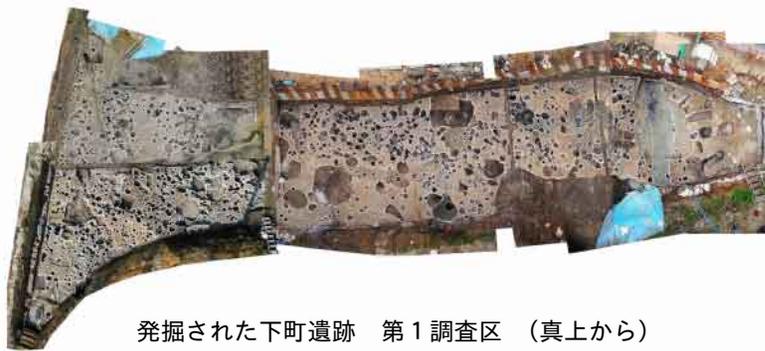


# しもちょういせき 4 下町遺跡

所在地：三条市西大崎<sup>にしおおさき</sup>二丁目27番4号ほか  
 時代：平安時代<sup>へいあんじだい</sup>、室町時代<sup>むろまちじだい</sup>～江戸時代<sup>えどじだい</sup>

## 遺跡の概要

下町遺跡は、三条市西大崎<sup>にしおおさき</sup>地内で施工された<sup>けんどうおおもほ</sup>県道大面保内線<sup>ないせん</sup>バイパス道路改良工事中に発見されました。現在の地表より約1.2m地下に埋もれていた当時の地表面に掘り刻まれた多数の柱穴<sup>はしらあな</sup>や井戸<sup>いど</sup>、溝<sup>みぞ</sup>、廃滓場<sup>はいさいば</sup>などが発掘され、出土した遺物<sup>いぶつ</sup>から室町時代<sup>むろまちじだい</sup>（500～700年前）を中心とする遺跡<sup>いせき</sup>であることがわかりました。



発掘された下町遺跡 第1調査区（真上から）



発掘された下町遺跡 第1調査区（東から）

## 発掘された遺構と遺物

遺構 発掘された遺構は約3000にもおよび、その多くが調査地西側の第1調査区に集中しています。中でも一番多く発掘されたのは掘立柱建物の柱穴<sup>ほったてばしらたてものはしらあな</sup>です。同じ場所で何度も建替えられたため、重複して発見<sup>はしらあな</sup>されました。柱穴からは多くの柱根<sup>ちゆうこん</sup>が出土し、縄をかけ運搬したと思われる穴が開けられた大型の柱根<sup>ちゆうこん</sup>も見つかっています。また、



上：根固めされた柱穴



右：縄かけ穴のある大型柱根

柱をしっかりと支えるために色々な方法で根固めされた大型の柱穴<sup>はしらあな</sup>が多数確認されたことから、大規模な建物の存在が推定されます。

井戸は33基が発掘され、石組みの井戸が1基見つかっています。この井戸<sup>いど</sup>の構造は、20cm前後の川原石<sup>かわらいし</sup>が積み上げられた石組み<sup>いど</sup>が井戸下部<sup>きおけ</sup>までなされ、底に木桶<sup>きおけ</sup>が付設されており、技術力の高さが窺<sup>うかが</sup>えます。この井戸から、有力者の屋敷の存在が想像されます。



発掘された石組井戸



石組みの状況



井戸の底に設置された木桶

遺物 中国から  
 輸入された陶磁器類を  
 はじめとし、珠洲焼、  
 越前焼、瀬戸美濃焼など  
 の国内の各産地で焼かれ  
 た陶器が出土し、漆器、  
 下駄、柄杓、折敷などの  
 職人によって作られた豊  
 富な暮らしの品々が発掘  
 されています。



遺物写真

- ①珠洲焼②越前焼
- ③天目茶碗④漆器
- ⑤折敷⑥古銭
- ⑦柄杓⑧茶臼
- ⑨砥石

### 下町遺跡の鍛冶

下町遺跡で注目されるのは、鉄鍋などの  
 鋳型です。この遺跡のある大崎地区は、当  
 時「大崎保」と呼ばれていて、ここを本拠地  
 とした「大崎鋳物師」といわれる職人集団が  
 いたとされています。この大崎鋳物師は、各  
 地に出向いて、梵鐘を鋳造したり、鍋などの  
 製品を作り、売り歩いていたことが、梵鐘に  
 残された銘や古文書などからわかっていまし  
 た。まさに、下町遺跡から出土した鋳型は、  
 大崎鋳物師の生産痕跡を物語ります。

その他にも鍛冶に関連する遺物が多数出  
 土しています。鉄滓（金くそ）、鞆の羽口や  
 鍛冶炉の破片などが多量に出土した穴が発  
 掘されました。鉄を精錬した大鍛冶の廃滓場  
 と推定しています。また、その周辺では、  
 小鍛冶による製品作りも行われていたよう  
 です。

しかし、工房や鍛冶炉などの跡は発見され  
 なかったため、隣接地で鍛冶が行われていた  
 と考えられます。

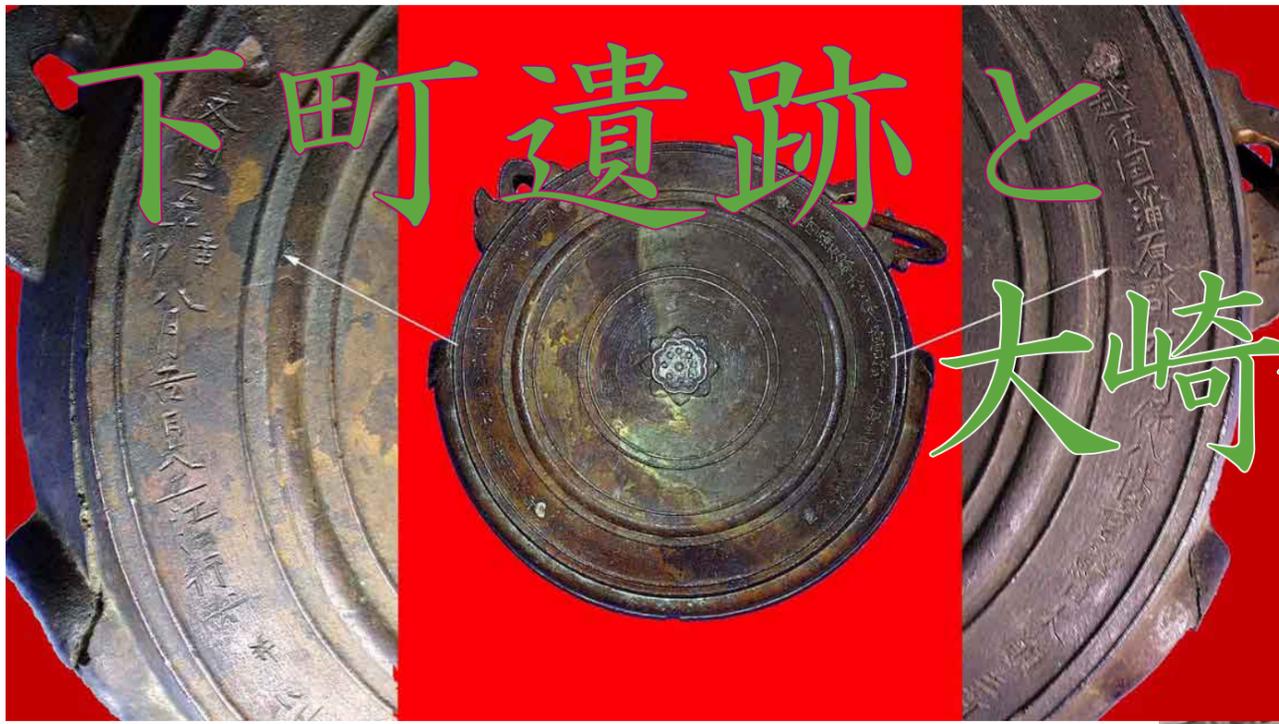
これらの出土品は、三条の金属産業史をひ  
 もとく上で、大変貴重な発見です。



発掘された鋳型



鉄滓、羽口、炉壁が多量に出土した廃滓場



# 下町遺跡と大崎鋳物師

しもちょう いせき  
下町遺跡のある  
おおさき  
大崎地区は、当時  
おおさきほ  
「大崎保」と呼ばれてい  
て、そこを本拠地とし  
た「大崎鋳物師」とい  
われる職人集団がいた  
とされています。この  
おおさきいもし  
大崎鋳物師は、各地に  
ほんしょう ちゅうそう  
出向いて、梵鐘を鋳造  
したり、鍋などの製品  
を作り、売り歩いていた  
ことが、梵鐘に残さ  
れた銘や古文書などか  
らわかっています。

しもちょういせき  
下町遺跡から出土  
した鉄鍋の鋳型は、  
おおさきいもし  
大崎鋳物師の生産活動を  
物語る貴重な資料です。

ぶんめい  
文明3 (1471)  
おおさきほはちまんぐう  
年に大崎保八幡宮に  
ほうのう わにぐち  
奉納された鰐口で、  
だいく えぐち ゆきやす  
大工江口行安らによ  
ちゅうそう  
って鋳造されたもの  
です。この鰐口によ  
り、大崎鋳物師は、  
江口姓の鋳物師であ  
り、すでにこの時期  
に操業を開始してい  
たことを知ることが  
できます。



ほんしょう  
この梵鐘は、会津法用寺（福島県大沼  
郡会津高田町）のもので、文明6 (1474)  
だいく かんばらくん おおさきじゅう みょうじつ  
年に大工蒲原郡大崎住妙実らによって  
ちゅうそう  
鋳造されたものです。大崎鋳物師が、地元  
だけではなく、隣国までもまたにかけて活  
躍していたことを知ることができます。

一 大窪村由来歌代由緒  
「法勝」  
大窪村由来歌代由緒  
六郎右衛門  
藏人方供御人鋳物師等諸役並五畿七道諸國以下免除事、任度々証文之旨  
不可相違、兼又非座人兼商売事同被禁止テ亦可令事難役之由可被下知、  
右方左方大仏方等之由天氣々々也、仍執達如件  
天正二年十一月廿三日  
藏人式部丞殿  
右中将 御在拜

寛  
夫大久保村之藏者惣大領守三輪大明神ニ而、勅座之張業者人皇四拾五代  
聖武天皇御宇天平十三年巳年、伊予國越前郡三輪大明神之製幣幣を以奉  
還、当所を以て三輪郡とすと云云  
延喜勅式五拾卷ニ越後國七郡志 三輪 前集

内  
神名帳武巻ニ三輪郡三輪之神社ニ而當國中五拾六座之其一ニ御座  
候由

天承元年辛亥年三輪大明神大祭祀之節、探湯之記ニ依て御本社ノ乾之方六  
七町を去り諏訪大明神を勧請す、今此社を産神と奉拜致候  
扱又鋳物師職之筆諸祭所之御神者  
天願戸命 石坂姥命

此二神、内侍所之御鏡を鋳造賜ふ故祖神と云  
鋳物師奉業論言由来者、人皇七拾六代近衛院之御宇、仁平三癸亥年鴉  
禁中に崇りをなす時に、殿舎に仰せて鉄燈籠を作らしめ給ひ共一円去り  
ゆかつ、川内國ニ吾人之鋳物師あり、其頭禁中に召仕へれるか、かれ  
か申様わ、洛中ノ鋳物師を被召集、是ニ仰て鋳にて鋳造らせ給ハハ去り  
ゆき可申と言上しけれ、此旨を聞し召され勅命を洛中ニ下し給へば、  
多の鋳物師共數多之燈籠を鋳時ニ鋳立、是を以て、禁中を照らし、時に  
源三位頼政命して化鳥を射さしむ、是れひとへに鋳物師の功ならんこと  
を御感し有て、汝等願あらば何ニても可任望之旨奉業勅立、時に鋳物師  
勅客申上れる者、所領封録も望無御座、唯願者日本の諸役を御免願候ハ  
者願之通り相叶、陸地者駒之運びの通へぬたけ、蒼海者船の路かへの及  
へぬたけ諸役御免なされ、大道者六尺貳分・弓手三尺・馬手三尺ハ鋳物  
師之權道たるへし、馬ころは其里寄て可弁之との御勅印を頂戴仕、此御  
礼として鋳物師青銅を奉獻、此例ニ依り日本國中ノ鋳物師青銅を以年首  
ニ仕由

但し、當國ノ鋳物師本座者住昔者三ヶ所ニ御座候、於類城郡者青野村  
ニ而一、三輪郡大久保村ニ一、蒲原郡大崎村ニ一、右三ヶ所  
之鋳物師年々年無相違奉獻上之所、當國之年首相止ミ申調ハ、上杉  
景勝公之御代ニ從京都拜様と申官女御下向之時、當國者ヶ國之儀年々  
年首御免之儀を御願在て、向後年首相止申と旧帳ニも記置申候、尤青  
野・大崎兩所之兩治者断絶仕、跡而已斗相殘居候、右三ヶ所之兩治家業  
相統仕居候節三輪赤湯郡三輪郡相定置候、但大崎鋳物師ハ蒲原郡古  
志郡也、大久保村之鋳物師ハ三輪郡魚沼郡也、青野村之鋳物師者類城郡  
松の山六拾六ヶ村、此外別余ハ三ヶ所共ニ入込ニて御座候

『柏崎市史資料集近世篇』下より



いぐり  
三条市大字井栗地内にあ  
る藤ノ木遺跡は、室町時代  
の屋敷跡です。発掘された  
井戸から鉄鍋がほぼ完形で  
出土しました。この鉄鍋は  
大崎鋳物師が作ったものであ  
る可能性があります。

こもんじよ  
この古文書によれば、  
むろまちじだいまつ おおさきいもし  
室町時代末に大崎鋳物師が  
なべざ  
鍋座として、鍋などを作り、  
えちこのくにかんばらくん こしくん  
越後国蒲原郡、古志郡での  
専売権を得ていたとしてい  
ます。